

私の授業

一魅力のない人間による魅力ある授業は可能かー

橋本 修

人文社会科学研究所助教

ここ10年弱、主に、共通科目「国語」と人文学類日本語学コースの専門科目を担当してきた。「国語」は大学生の、文章表現を中心としたコミュニケーション能力を高めるための授業であり、日本語学の専門科目の方は、文法論・古典の講読・演習等である。授業の際に気づいた点を以下に挙げ、読む方へのなんらかの参考になれば幸いである。

担当開始時から授業改善の材料にしようとして、時折、学生による授業評価のようなことを行ってきた。個別の記述は文字通り様々であるが、量的に見た場合、大まかには以下のようなことが見て取れた。一つは、共通科目「国語」の方が、担当初期は不評であった、という点である。二つめは、初期の不評が改善された後も含め、「国語」に対する評価の方が偏差(受講者の評価の個人差)が大きい、という点である。

紙数の関係で細部は省略するが、上記2点から私が導き出したひとまずの結論は、

「『国語』に対する評価値の偏差が大きいのは、コミュニケーション科目である『国語』において、教員個人の人間性に対する評価が授業評価に与える影響が大きいから(受講者の教員に対する好みは様々であるから)であろう。そして、専門科目より『国語』において評価値がやや低いのは、私に人間的魅力がないからであろう。」専門科目については、教員個人の魅力・人間性は、(ハラスメント等は論外として)あまり関係がない。魅力のない教員の魅力ある授業は可能である。一方、コミュニケーション科目である『国語』の場合、受講者はどうしても、コミュニケーションを大してとりたくないような魅力の薄い人間が授業を行うと、授業自体に魅力を感じにくくなる、というわけである。魅力的でない人間にコミュニケーションの方法など習いたくない、というのはもっともな感覚だ。確かに私が学生でも、教壇に立っている私には、特に人間

性という意味では魅力を感じないなあ。さあ、どうしよう。

ここで私は自分の人間的魅力を高めることを考えた、かというところではない。それは無理だろうと考えた。「国語」担当の、他の先生には人間的魅力に満ちあふれた先生が多い。私から見ればもはや芸術的とか言いようのないトークを展開する先生もいらっしやる。努力でどうにかなるものではないと判断した。ではどうしよう。比喩的な言い方しかできないのであるが、大まかに言うと、「受講者の正面に立つのをやめたらどうか」と考えた。大学の教員をやめる、というのもちょっとだけ考えたがさすがに踏みとどまった。

まず、授業における、教員が一方的に話す時間を極力少なくし、受講者の作業時間を増やした。教員がいきなり一般的説明を話すよりは、作業をする過程で出てくる問題点・疑問に答える形にした方が、学生が教員の個人的人間性に関心を持たないであろうと考えたからである。

作業の内容についても、目標とするコミュニケーションの相手が、より明確かつ具体的になるように努めた。中学高校などで経験のある方も多いと思うが、論説文・読書感想文などの文章は、特に読者を想定しない場合、普通の大人を意識する。そしてその代表として無意識に立ち現れるのは

目の前の教員であり、その目の前の教員がどうも魅力的でないというのではどうしても文章を書くモチベーションが上がりにくい。そのため、課題となる文章を書かせるときには、できるだけ、私ではない具体的な読者を設定するようにつとめた。例えば、「新聞の論説への投稿を念頭に置いたスタイルの論説文」「小規模調査の結果を研究会(のようなもの)で発表」「学園祭で講演を依頼したい人への手紙」「このクラスの中で人気が出そうなエッセイ」など、「読者は私(橋本)ではない」と言葉では言わないが、結果的には「受講者がコミュニケーションしよう／表現しようとする相手」のイメージから私をできるだけ排除させるような課題設定を行った。

さらに、時間の都合でいつもできるわけではないが、インタビューおよびインタビュー記事の作成、という課題も取り入れた。この場合も、インタビューの相手は教員である私ではないし、インタビュー記事の主たる読者は大学生等、教員でないものに設定した。インタビューという作業は主として現場で行うものなので、授業に取り入れるのは各種の難しさを伴うが、受講者は「インタビューの受け手に対してどうするか」に集中するので、サポートする教員の人間性などに関心を向けなくなる、という意味では非常に効果がある。例えばなに

かをするには段取りが大切である、ということ講義で面白みのない私が言っても心に残らないが、インタビュー現場で相手からよい話を聞き出したり、不快感を与えないためにどうしても段取りが重要になることは、インタビュー相手を大事に思う人間であれば、自然に身につけてゆく。これも、コミュニケーションの相手が橋本でなく、自分が選んだ魅力的な相手だからこそ、というわけである（なかには非常に興味深いインタビュー記事を書く受講者も現れた。公開を積極的に容認・希望しているインタビュー記事に、人間学類小松華奈氏による病児保育支援を行っている医師へのインタビューがある。小松氏・医師の了解が得られているので、ご興味のある方は小松氏 khana-49@bg8.so-net.ne.jp が橋本 ohashimo@sakura.cc.tsukuba.ac.jp までご連絡下さればお送りします）。

以上のような、「国語」において教員が受講者の正面に立たず、横に立ってサポートに回るという試みは、私の場合、ある程度効果があったようである。授業評価の結果はある程度改善し、専門科目並みになってきた。ただし忘れてならないのは相対的に改善されたと言うだけだ、という点である。近年開始された私の授業に対する全学授業評価の値は、「せいぜい普通」というところである。元が非常に悪かっただけなのかも

しれない。また、以前より減少傾向とは言え、やはり依然として「国語」に対する評価の方が偏差が大きく、数が減っただけで、今でも絶賛から酷評までいろいろな評価が出てくるのは「国語」の方である（絶賛はもちろん僅少）。コミュニケーション科目においては教員の個人的人間性を完全に排除するのは難しいのであろう（定義にもよるが、専門科目でも完全に排除はできないと考えるのが普通であろうか）。

さらに、この方法には非常にコスト（主として時間コスト）が掛かるということも実感である。「作業をサポートする」ことをある程度具体的に経験したことのある方であれば、上記の方向での試みは、教員にとって非常な負担増になることは簡単におわかりであろう。普通の人間の魅力の持ち主にとっては、あまりコストパフォーマンスのよいやり方とは言えないかもしれない。冒頭段落末尾に「参考になれば幸いである」と書いたが、私以外の誰にも参考にならない可能性も出てきたところで筆を擱く。

（はしもと おさむ／日本語学）